『韓国近代都市景観の形成
——日本人移住漁村と鉄道町——』

布野修司・韓 三建・朴 重信・趙 聖民 著

山元 貴継

一

評者の個人的な研究分野の話からで恐縮だが、地理学の中でも歴史地理学では、近代あるいはそれ以前の都市内部、または集落単位での景観復原のために、地籍図や土地台帳が活用されてきた。このうち地籍図は、都市部では六〇〇分の一、農村部では一二〇〇分の一以上といった大縮尺の図面で、各「地筆」（いわゆる、それぞれ〇〇番地などと地番が付された小さな土地の一つ一つ）の位置関係や、各「地筆」どうしの境界線が描かれている。これに対して土地台帳は、各「地筆」の地目（土地利用）や面積、土地所有者の情報と、その変遷とが記録されている。これらは日本国内では明治期以降、地税の額やその負担者を確定する根拠として整備されたものであるが、第二次世界大戦後は不動産登記法の改正に伴い、地税徴収の直接的な根拠としての役割を失って、各地の法務局に移管されている。そして歴史地理学などでは、研究対象とする時期の地籍図を用意し、そこに土地台帳に記載されたその時点での各「地筆」の地目や土地所有者をもとにした塗り分けを行うなどして、過去のある時点での景観復原や、土地所有関係の解明を行うといった手法が採られてきた。

しかし、こうした研究手法は何も地理学だけの独壇場ではなく、建築学の中でもとくに農村計画などの分野において、積極的に用いられてきた。今回紹介する本書は、こうした建築学の研究者によって一九九〇年代から積み重ねられてきた、韓国の都市内部や農漁村などを対象とした研究成果を集大成したものである。その内容は全体的には、韓国国内に残る、日本が朝鮮半島を植民地統治していた時期（以下植民地期）に各地に建てられた施設や「日式住居」に注目し、それらの建ち並んでいたであろう植民地期の「都市景観」を分析するものである。そして基本的には、建築学が最も得意とする現地採寸に基づく残存建築物の平面図化で建物内部の変化などを丹念に分析したものであるが、一方で各章を構成する事例研究において、韓国各地でのそれらの建物群の立地の前提を明らかにしたり、残存建築物の周辺街路との関係を含めた分析を行ったりするために、その周囲を地籍図と土地台帳（韓国では現在、市庁や郡庁といった地方自治体において保管されている）とで復原するという手法も共通して用いているところに特色がある。

その内容の多くは、日本建築学会計画系論文集などにおいてすでに発表されたものであるが、字数あるいは図表の大きさに制約の大きかった同論文集と比較して、その内容や図表は非常に精緻なものとなった。まずは以下に、本文の目次を提示したい。

序　章　韓国の中の日本と景観の日本化
何故、韓国の日本人街か？

1　朝鮮の開国と植民地化
2　植民地朝鮮と日本人
3　日本植民地都市
4　オンドル化とマル、そして日式住宅
第Ⅰ章　韓国近代都市の形成
Ⅰ―1　韓国都市の原像
Ⅰ―2　開港場と開市場
Ⅰ―3　近代都市計画の導入
第Ⅱ章　慶州邑城
Ⅱ―1　慶州邑城の空間構成
Ⅱ―2　慶州邑城と地域祭礼空間
Ⅱ―3　邑城空間の変容
Ⅱ―4　土地所有の変化
Ⅱ―5　慶州―新羅と植民地遺産の狭間で
第Ⅲ章　韓国日本人移住漁村
Ⅲ―1　日本人移住漁村の成立と発展
Ⅲ―2　「離れ島」の移住漁村：巨文島
Ⅲ―3　「沿岸」の移住漁村：九龍浦
Ⅲ―4　「河口」の移住漁村：外羅老島
Ⅲ―5　日本人移住漁村がもたらしたもの
第Ⅳ章　韓国鉄道町
Ⅳ―1　鉄道の敷設と鉄道町の形成
Ⅳ―2　三浪津の鉄道町
Ⅳ―3　慶州の鉄道町
Ⅳ―4　安東の鉄道町
Ⅳ―5　日式住宅と韓国住宅
Ⅳ―6　鉄道町のもたらしたもの
終章　植民地遺産の現在

このほかに、章の間に、トピックとして二つのAppendixを挟んでいる。

二

これらの章構成にみるように、本書は「韓国近代都市」を題目に掲げながらも、実際には漁村や、都市よりかなり小さい規模となる「(鉄道)官舎群」も対象にしている。さらに、資料として示されているのも地形図から、地籍図をもとにした景観復原図、そして建物の平面図と多様であり、複数の著者による事例研究の寄せ集めとの印象は否定できない。しかし、序章にて示されるように、朝鮮半島の中に形成されてしまった「日本人のための空間」の実態を明らかにするというところで、各事例研究は目的を共にする。では、具体的に各章の内容をみていく。

序章では、以降の事例研究の背景となる、朝鮮半島の植民地化の過程と朝鮮半島各地の開港過程、日本の敗戦までの歴史などを紹介する。その中で、「日本植民地都市」を取り扱うにあたっての議論を、既存研究の内容をふまえて紹介する。そこではとくに、植民地都市が土地区画整理など計画的な都市計画の舞台となった一方で、負の遺産として、農村からのプッシュ要因による植民地期ソウルへの人口集中が注目されることと、居住地域・商圏・娯楽施設などに「二重性」が見られたことを強調する。すなわち、

植民地都市は過剰人口の「吹き溜まり」となり、そこでは支配者となる日本人と被支配者となる朝鮮人とが、経済的な二重構造を形成するだけでなく、空間的分離（居住地分離）＝セグリゲーションを見せていたことが指摘される。他に特徴として、西欧の植民地都市とは異なり、西海岸の港湾都市である仁川を除いてチャイナタウンの形成が見られないことに象徴されるように、日本人および朝鮮人以外の居住者がきわめて少ないことを挙げる。これらの言及が、以下の事例研究の大前提となる。

第Ⅰ章でも引き続き、事例研究の背景として、朝鮮半島の伝統的都市の特徴および開港場の紹介を行う。そこでは、朝鮮半島の伝統的都市の原型としての都城のほか、朝鮮儒学とそれに基づいた身分制度、地方行政制度が紹介される。そしてとくに、朝鮮半島の伝統的都市の代表として、高麗時代以降（李氏）朝鮮時代にかけて建設され、最盛期には全土に一九〇存在していたとされる「邑城」を挙げる。それらは行政都市であるとともに、城壁に囲まれた防御空間であった。「邑城」内には多くの行政機関があり、その居住者も特定の層に限定されていたことを指摘する。

その上で、植民地時代の大きな動きとして、近代的な地籍図および土地台帳を整備する土地調査事業、都市計画としての市区改正・朝鮮市街地計画令とその実施による邑城の解体・祭祀施設の解体・官衙建築の解体を紹介する。土地調査事業については、この分野の代表的研究者である愼鏞厦の論考を挙げ、同事業が申告制に基づき多くの農民の土地を「朝鮮総督府」の所有とし、また、森林、山野および未墾地を同じく「朝鮮総督府」の所有としたことを紹介するが、これらと「邑城などの解体」とが、第Ⅱ章の事例研究のための前提となる。

第Ⅱ章からが事例研究となる。第Ⅱ章は、朝鮮半島東南部の伝統的都市である慶州邑城およびその周囲の空間構造の変化を、とくに土地所有の変化との関わりに注目しながら分析する。慶州邑城では、高麗時代以降に周囲を取り巻く城壁とその少し外側に濠が築かれ、その内部に官衙および祭祀空間が設けられるといった整備が進んでいた。しかし植民地時代に入り、市区改正を契機として城壁が撤去され、その内部に道路や公共機関が建設されて、日本人が移住してくることになる。城壁は道路などになり、官衙の跡も公共機関などに活用されていく。こうして、閉鎖的な空間であった「邑城」の構造が劇的に変化していくのであるが、その過程を地籍図や土地台帳を用いて詳細に追究する。

一九一二年の査定時、すなわち土地調査事業直後の慶州邑城とその周囲では、かつての城壁と官衙の跡などが国有地となり、ほかに城壁と濠との間の空間などが東洋拓殖会社所有地となっていた。そして、比較的面積の大きい日本人所有の宅地が点在しており、それらの半数以上は幹線道路沿いにあたることから、商業に有利な土地をすでに植民地期当初から日本人が確保していたことを示しているとする。ただし、一帯の土地の大部分は朝鮮人所有地であり、かつそれらの多くは、邑城外に居住する人々の所有する宅地および田で占められていた。そこに、一九四五年の終戦時までに日本人所有地の拡大をみるが、北部里などにおいては日本人による土地所有が進展しにくかったことを指摘する。このように、確かに植民地期は地方都市においても日本人が土地の所有を拡大させていた時期であると言えるが、一方ではその拡大は城壁

や官衙が不必要とされてしまったことに後押しされて進んだことと、朝鮮人（韓国人）のコミュニティーが強固であったところでは日本人住民の進出の余地自体が少なかった、という指摘がなされる。こういった詳細な指摘は、土地台帳などを丹念に分析してはじめて可能となるものであろう。

続く第Ⅲ章では、朝鮮半島各地の海岸に形成された日本人移住漁村について検討する。植民地期の朝鮮半島において、日本人が進出したのは都市部だけではない。すでに植民地期以前から、距離的な近さもあり、朝鮮半島の南海岸を中心に、多くの日本漁民が移住していた。そして生まれた「自由移住漁村」に加えて、一八九七年から一九一九年までに、府県や朝鮮水産組合、東洋拓殖会社などを通じて、計画的な「補助移住漁村」も形成された。そして、これらの漁村の存在は、一九二〇年代以降になってようやく始められたとされる朝鮮半島各地の本格的な漁港整備の要因になったという。そして事例研究として、具体的には、事例地域として巨文島、九龍浦および外羅老島の移住漁村を取り扱う。

各漁村とも、非定型な街路をみせる斜面部と、定型の街路をもつ埋め立て部とで構成され、日本人は後者に多く居住する形となっていた。そして、漁村特有の、敷地内にあまり庭を持たない屋敷が建ち並ぶこととなる。これらの屋敷は「日式住居」として、現在も各漁村に残る。それらは、背後の余地に水周り部分などが増築され、襖などで区切られた間取りは個室化されて、現地の住民に利用され続けている。また、店舗付き住宅は、二階の間取りはそのままに、一階の店舗部分は大きく拡大されていった。そして、こうした変容を、著者は植民都市の一つの形成パターンと位置づける。

さらに第Ⅳ章は、植民地期に朝鮮半島において進められた鉄道の敷設に伴い、その職員の居住のために造られた「鉄道官舎」を中心に形成された「鉄道町」を取り扱う。「鉄道町」はその性格上、必ずしも既存の集落近くに形成されるとは限らず、また、職員が居住することを前提に、日本人にとっては一般的な「玄関」を持つといった「日式住居」の建ち並ぶ、特有の景観を造っていく。そこには、朝鮮半島の伝統的な集落などとは異なり、グリッド・パターンの定型街路をもった街が展開した。そして、のちに朝鮮半島各地で鉄道施設を軸とした都市発達がみられるようになるのに従って、「鉄道町」はまさに近代都市の中核の一部となっていくこととなる。町は査定（土地調査事業）当初、全域の半分以上が日本人所有地で占められる状況にあったが、次第に「国有地」となる土地を拡大させ、そこに官舎群が設けられた形となる。このほか、鉄道駅の周囲には、駅前商店街を構成する「日式住居」も建ち並んでいく。

そして、これらの鉄道官舎は、解放（終戦）後も現地の鉄道関係者によって居住が続けられたのち、一九七〇年代くらいから一般に払い下げられ、その規格的な間取りが劇的な変化をみせることとなる。そこでは、敷地の中央に北側玄関のある家屋を配置し、その周囲に庭をもつ構造であった鉄道官舎の多くが、家屋の出入り口はもちろん、敷地の出入り口をも南側に変更している。また、家屋の周囲の空間に別棟を建て並べることで、一見すると建物に取り囲まれたその内側に広場「マダン」をもつ、朝鮮半島の伝統家屋を模した構造へと改築されていく。また、第Ⅱ章で取り扱わ

れた慶州の町などにも、鉄道駅とともに鉄道官舎が設けられていたが、これらの官舎も、敷地分割や別棟の増築を経て、今日まで活用され続けている。ほかにも、これらの「日式住居」には、植民地に建設が続く中で、朝鮮半島特有の環境に適応するために「改良オンドル」が取り入れられるといった実験が試みられていたことも指摘される。

最後の終章では、筆頭著者である布野氏が一九九三年に訪れた朝鮮半島北部、すなわち北朝鮮の開城や平壌の現在の景観についてふれたのち、韓国の各都市の現在の景観についても述べていく。韓国の首都ソウルなどでは、すっかり現代的な景観となった中に、植民地期の都市計画、建築物の名残りをみる。それらについて、韓国ではやはり否定的な意見が与えられてしまうことについても言及する。

三

以上見てきたように、本書はかなり多岐にわたる対象地域および対象スケールを取り扱っている。しかし、本書を読むにあたってはまず、あらかじめ以下のような、植民地時代の朝鮮半島を研究する上での大きな障害への理解が必要であろう。まずは、不幸な歴史がそうさせたのであるが、植民地期の朝鮮半島を扱う際には、どうしても日本人が支配者、朝鮮人が被支配者という認識のもとで、前者を悪、後者を善とする構図が描かれやすい。そして事例研究においても、植民地期に日本人が朝鮮半島で行った活動の全てを絶対悪とする前提、とりわけ「収奪論」のもとで分析が進められるきらいがある。もう一つが歴史的資料の取り扱いである。植民地期はさほど遠い昔ではないにもかかわらず、近年まで、当時の資料の多くについては散逸してしまっているという認識が広く共有されてきた。敗戦とともに日本および日本に関わる資料は全て焼き尽くされたとか、植民地期の地籍図や土地台帳は全て朝鮮戦争時に失われたとする認識である。こうした、歴史的な資料がもはや存在しないという前提の上で、近年まで植民地期の朝鮮半島に関する研究の多くは、例えば一九二〇～三〇年代に朝鮮総督府の嘱託研究者によって著された一連の報告書群をもとにした説明や、当時の法規類の解釈による制度史的な分析にとどまる傾向がみられてきた。

その中で本書は、朝鮮半島における日本人の活動の是非について議論があることを紹介しつつも、必ずしもその是非を判断することを前提にせず、それらの判断について実証的な事例研究を通して読者に委ねるスタンスを採る。むしろ植民地都市の二重性の中で日本人は、現地＝朝鮮半島ですでに形成されていた空間とは別に新規の空間を構築していることが一般的であり、また、すでに形成されていた空間に日本人が入り込む場合でも、本当に現地の人々＝朝鮮人を排除してまで有利な空間を日本人が占有してようとしていたかどうかについては、冷静な分析が必要であろう。本書に示された豊富な図面は、読者にその判断の材料を与えてくれる。もちろん、現地に残る住宅を探し出し、採寸などして作成した建物平面図は、植民地期に日本人が現地でどのような生活をしていたのかをうかがわせるだけでなく、その後現地の人々が居住するようになるに伴ってどのように現地化されていったのかを示すもので、非常に興味深い。それに加えて、とくに本書を構成

する事例研究の時点ではまだ「もはや現存しない」というイメージが強くあったであろう地籍図や土地台帳を駆使して、邑城内外の空間構造とその変化や、日本人移住漁村の拡大、「鉄道町」の拡大過程などを丹念に追い、それを図面化して提示しそうとした労力は大変なものであったと思われる。本書で示された多くの図面、そして指摘を受けて、日韓両国の読者がどのような判断を行うのか、広く意見を求めてみたいところである。

ただし、惜しむらくは、先にも述べたように、どうしても各章の内容に統一性を見いだしにくいところに難がある。とくに、最終的には布野氏以外の三名の博士学位請求論文の内容も加えてまとめた形を採ったとみえ、その研究対象となる地域はもとより、その分析スケールに大きな幅がある。とくに、慶州邑城とその周囲を扱った第Ⅱ章はまさに近代「都市」を対象としたものといえるが、「日本移住漁村」や「鉄道町」を「近代都市」というタイトルで総ずることができるのか、という違和感は否めない。

しかし、こうした些細な指摘を抑えるだけの成果を、本書は提供しているだろう。これまで、日韓両国に共通して、植民地期において日本人が朝鮮半島に進出したことに起因する問題については、どうしても首都ソウルや一部の開港都市についての分析に注目が集まりすぎた。また、同時期の農村部における問題も、伝聞などに基づいた感情的な語りが取りざたされることが多い。こうした中で、様々な中小都市や農漁村における事例研究の成果を提供した本書が、今後の植民地期の朝鮮半島を対象とした実証的な研究の進展において、多くの視座を与えるものとなることを期待したい。

（A5版　五四三頁　二〇一〇年五月　京都大学学術出版会　七〇〇〇円（税別））

（中部大学人文学部准教授）